

私の本棚

田嶋 康利(日本労働者協同組合連合会専務理事／協同総合研究所常任理事)

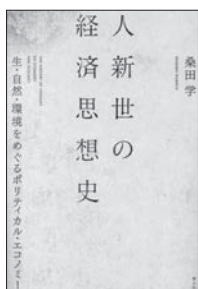
田嶋さんより、年末年始で読んだ本を含めて4冊の図書をご紹介します。



「協同労働」が拓く社会 ーサステナブルな平和を目指して

本山 美彦 文眞堂／2022年12月

GDPをはるかに上回る金融資産とヘッジファンド、日本経済の低成長と雇用不安の中で協同労働への期待、労働者協同組合を支える金融機関、不耕起栽培論や自抜型林業などに転換されるべき農林業と労働者協同組合による commons の可能性を提起。



人新世の経済思想史 ー生・自然・環境をめぐるポリティカル・エコノミーー

桑田 学 青土社／2023年2月

「エコノミーの脱自然化」ー経済からの生態の切り離しが進み、自然科学と社会科学が峻別(専門分化・制度化)された時代。「脱成長」にも通じるラスキンの「豊饒さのヴィジョン」の中に、人新世の経済とは何かを考えるヒントがある。



ケアしケアされ、生きていく

竹端 寛 ちくまプリマー新書／2023年10月

中核的感情欲求、他者の他者性、魂の脱植民地化、「理性の悲観主義ではなく実践の楽観主義」(バザーリア)、リカバリーの三段階などを自らの体験を踏まえて、ケアの本質を探る。ケアとは「共に思いやること」(政治学者ジョン・トロント)。



野生のしっそう ー障害、兄、そして人類学とともに

猪瀬 浩平 ミシマ社／2023年11月

見沼で猪瀬さんが語られたこと、そして私の家族のこと(障害のある親族)を想起。「兄のしっそうは、わたしが本来持っているはずのヒリヒリとした自由の存在を気づかせてくれる。わたしたちが生きていることは、ヒリヒリとした自由の中にある」。